



問五 — 線④「一見したところ苦渋にみちてはいるが、それでも他の何ものにも換えがたい楽しみであつたにちがいない」とあるが、ここからうかがわれる筆者の日記に対する考え方に合致するものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 保存という行為の本質を純粋に追求した日記は、出口のない迷路であるとともに、再読や新たな記述の追加によって想像力が解放される場所でもある。

イ 日記を記述することは、逆に記憶を希薄にするという作用を持つが、日記を読むことを通して、記憶を喚起し、それを想像力に結びつけて、存在感を味わうことができる。

ウ 日記の機能を極度に追求したために、外部への道を閉ざされたような日記は、自己への沈潜・耽溺に終始する一方で、自己を完全に保存してくれるものとなる。

エ 日記は、蓄財や収集の場合と違い、保存した自己を他のものと交換することはできないが、それだけに自己を不変のものとして保存するという楽しみがある。

オ 個人が内面を書き記した日記は、自己目的化や自己疎外を通して近代精神の病をもたらすが、一方において、知識や財を記録し、永遠化する楽しみがある。

「ア」

問二 — 線①「保存という作業の基本を忠実に守っている」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 保存において重要なのは、現状をそのまま残すことだが、日記を後世に残すために種々の工夫をこらさずパヴェーゼの行為は、現在のあるがままの事実を忠実に将来に伝えようとする営みであるということ。

イ 保存物が腐らないような密閉性の高さこそが保存の要点であるが、日記を一人の読者として点検するパヴェーゼの行為には、自己の内面を純粋に密封しようとする姿勢が見られるということ。

ウ 保存のためには、人工的に手を加えることが必要であるが、その日の日記を記すだけではなく、後から日記に記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存に必要な加工にあたるということ。

エ 保存をするのは保存物を何らかの形で用いるためであるが、自分で自分の日記を読み、場合によっては記述を追加するパヴェーゼの行為は、保存物の使用という点で保存の目的になつていくということ。

オ 財産の保存は、その財が自己増殖していく点に特徴があるが、その日の日記を書くだけでなく、後から記述を追加していくパヴェーゼの行為は、自己をしだいに増殖させていくような行為となつていくということ。

「エ」

問三 — 線②「ここでも同じ原理が作動している」とあるが、何について、どのような原理が「作動」していると考えられるか。最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 近代ヨーロッパにおいて蓄財の精神が働いているのと同じように、ブルジョワ社会においても、財の蓄積を尊ぶ資本主義の原理が働いているということ。

イ 自己の内面を日記に綴る営みの背景に資本主義と個人主義の成長という原理が見られるように、趣味の域を超えた収集活動の広がりにもそのような背景があるということ。

ウ 収集はただの趣味以上のものであるが、収集活動と趣味活動の双方に、ブルジョワ社会を支える資本主義と個人主義の原理が働いているということ。

エ 資本主義と個人主義という二つの原理が近代ヨーロッパの基本的な精神を形成したように、その二つの原理が同じようにブルジョワ社会を形成したということ。

オ 日記の発達の起源に財の蓄積という商業活動の原理があつたように、収集活動が趣味以上のものとなつていくのも商業活動のためであるということ。

「イ」

問六 本文における筆者の主張に合致するものを次のア～カから二つ選び、記号で答えよ。

ア 日記という保存装置に保存された自己も、消費される点で、瓶に保存されたジャムと同じだが、その消費のあり方はジャムと大きく違つていく。日記に保存された自己の場合、収集された切手や昆虫と同じく、消費されることが最初から期待されていない。

イ 日記を書くという行為の本質的な部分にあるのは、日記を書く人物の孤独であるため、自己を増殖させたいという願望が生まれる。その自己増殖の結果、日記を書く行為は近代社会を生きる人間の孤独をいやし、孤独の迷路からの解放をもたらす。

ウ 日記に記述を追加するパヴェーゼの行為は、完成しない自己の像を完成させようとする果てしない試みである。その自己の像への執着は近代精神の病の徴候であるが、そこには過去を再構成するばかりでなく、想像力の領域でも存在の感覚を確認しようとする志向が潜んでいる。

エ 日記の書き手は世界にただ一人の個人であるという条件があるため、日記の中の自己は貨幣や収集品と違って、いくら自己増殖しても他のものと交換できない。個人のそのかけがえのなさゆえに、日記においては、自己の反省や克己心・向上心が記され、よりよい自己の実現に向けて努力が語られる。

オ 反省の記録としての日記は自己の向上という功利的な目的がある点で、商人のつける会計簿と類似する。しかし、世俗的な向上を目指す自己中心的な功利性ゆえに、社会的、道徳的に外部への道が閉ざされることになり、自己に沈潜する自己目的化した日記へと転じることもなる。

カ 書くこと自体が目的化した日記は、たとえ具体的に自己の出来事が書かれていなくても、自己増殖的な性格が強く、近代以降の美術館や博物館などと共通の構造を備えている。ただし、日記の場合、保存の対象が抽象的な自己の思念になる分だけ、自己目的化が純粋になる傾向がある。

「イ」「カ」